

◇ 3/21 (土)「素子とつくるマツコト in ガーデンビオン成田」

4月28日は成田市議会選挙投票日。私たちの生活に直結する問題を話し合い、解決しなければならない地方議会がより公平、開かれていきます。税金や行政のあり方をチェックし、市民のために活動する議員を育てて、差別や暴力のない社会をつくる方法を考えませんか？

13:00 スタート

会場：素子 成田のまちの二階ホールと今後への想い
ゲスト：ゆき 塚田 真菜 (松戸市議)
ステージ「The Sky」演奏
ワールドカフェ みんなで話し合おう! まちづくりの心
「投票へ行く運動」の呼びかけ

新しい時代を決める私たち

場所：ガーデンビオン成田 成田市並木町221-568 参加費：無料
主催：新しい時代を決める私たち 問合せ：090-1838-4988

1919 市民に開かれた自治体議会をめぐって

足立カズミ「『スリムカ』から学ぶ選挙の理想」

「選挙を変えたい」「国民の理想を」と、あきらめず知ることから、コトクリカを動かすこと。足立カズミが語る選挙の理想。

選挙の理想は「スリムカ」から学ぶ。選挙の理想は「スリムカ」から学ぶ。選挙の理想は「スリムカ」から学ぶ。

埋まる深谷 一館山 坂田残土問題

館山市の火山の懐に抱かれた美しい谷川が、残土で埋められ、4年が経ちました。春を見渡す我が家の前には、今日も300台以上のダンプが降りてきます。

2019 市民に開かれた自治体議会をめぐって

足立カズミ「『スリムカ』から学ぶ選挙の理想」

「選挙を変えたい」「国民の理想を」と、あきらめず知ることから、コトクリカを動かすこと。足立カズミが語る選挙の理想。

Viva Greens

グリーンズ千葉便り 第8号

—地球規模で考え、活動は足元から—

Contents

- * 『PURA VIDA』は みんなの願い — 足立カズミ 「『スリムカ』から学ぶ『緑の理想』」 2/6 報告
- * 『市民に開かれた自治体議会をめぐって調査』千葉県議会議員会 (2/19) 報告
- * 『イスラム国』安倍政権 世界をどう見るか? (2/20) 報告
- * 埋まる深谷 館山 坂田残土問題
- * 『インタビュー』私が出馬に挑戦する理由
- * イベント情報 始め

1 障害のある子もいない子も、共に学び、暮らし、暮らせるように

宮田 清子 (柏市、4期目)

30歳になるダウン症の長男は最初、障害のある子が通う通所施設にいたのですが、違和感を感じて途中から父と男児と保育園に入られたんです。小、中と近くの学校に行き、高校は5年浪人して定時制に。最重度の障害で、しゃべれないしトイレの始末もできないので見守る人がないと生活できないけれど、普通学級でやってきました。そこで、教育の場と、卒業後働く場所のことを考えるようになりました。当時の柏市では実績が1年未満の小規模福祉作業所に補助金が出なかったんです。場所を借りたのを乗り切り、1年目こそが大変なわけ。そうした制度を改めてほしいと思い、立候補したのが2003年です。

議員になった柏市。息子が参加して、生ごみを餌に飼う資源循環型社会を築いた柏「にわりの会」の活動をやっていたのですが、そうした市民活動も、障害のある人がたまたま、そこで仕事しているといった感じで自然と就労の場にならないうちの思いがありました。現在の柏では民間団体の地域活動支援センターなどが充実してきましたが、足りないところはグループホーム。相もたぬのホームが点々と生まれよう、建築基準を緩和して民家をホームとして使うことを主張しています。

2 地域資源の循環、とそのための市民自治!

会津 素子 (成田市、2期目)

2009年にエジプトほか新興国でのボランティアから帰国した。いじめや虐待、私が育った成田では驚かされた。そんなとき、経済成長一途ではなく、何世代も先を考えた政策を打ち出す党の出てきて、一般の光が射ってきたんです。その半年後に選挙があったのですが成田に縁の仲間はいなかったの、自分が出るしかない。成田は人口減っていく中で何と成長率を上げておきたい、それは別の幸せの在り方を提案しようとする私の考え方は議会でもマニフェスト、私の発言から削除すると言われたこと。それを聞きかたがたが傍聴席にいっぱい駆けつけてきたんだ。学校給食の問題、動物愛護の活動で知った方々、100人に声をかけたんだと、次々候補者にしました。成田はへんにお金持っているから、本当に「お任せ民主主義」、いらぬ問題を投げかけても、大きな反対運動に発展しない、それに「何か持ってきたらどう?」、3本目の清走路を作るんだか、カジヲを誘致するんだか...

そうではなく、空家や有機農業など、地域の資源を循環させるのが大事だと思っています。そのために、市民自治大会、[国家戦略特区]には市長が勝手に手を挙げて市民も議会も何一つ知らされなかったけれど、街というのには一人でも多くの市民がお互いに知恵を絞って、議論して作られるんです。2期目では「自治基本条例」を提案したい、仲間の議員を新しく発掘することも、課題です。選挙では並行して、「投票に行く運動」も開催しています。

3 「お願い」する立場から、自ら「作って」側へ

小田川 敦子 (白井市、初挑戦)

染色体異常を持った長女が生まれてから、そしてまでは存在を意識することになった議員さんというものが、それを、学校や行政に「お願い」することがしばしば出てきました。例えば入学、当時、支援学校と普通学級で別々に2校制の場所を、どちらか選べるように、一緒に探せば少なくとも空間を共有していた、いも分けられる」と感じることが多かったんです。当事者になって初めて知る「暗黙の境界線や制約」を壊していくには、声より勇気が必要でした。議員さんや教育委員、いろんな人に相談しながら、その都度「これかベストだ」と思える方へ進んでいくつもりです。

今年長女は無事20歳になり今年まで進路に満足していますが、振り返ってみると、それが白井市がやっていたことを「お願い」許してもらったこと、それがあって議員になること、個々対応でなく(国や県が)推定していることをまず導入し、暗黙の境界線や制約の少ない「個人を大切にしたい。福祉(ユニバーサルデザイン)の街」を白井市のスタンダードとしていきたい。白井市では今年、障害者のグループホームとして2件立ち上がりましたが、障害者も、これからは障害者になる障害児もたくさんいて、働く場所も確保機関はまだ足りません。先行を、選べるようにしていきます。20年間、その思いを障害者に留まらず、いずれ高齢者が子や子育て世代に波及するはず、という思いは長女を育ててきた20年間の実感です。そして、人に感じやすい環境の中で育つことで障害の子と違わない大人になった時、人に優しい社会へ還元していかないと。現在の満足を得る発展につなげられる社会をイメージして福祉の街づくりに尽力したいと、議員になる決意を固めました。

私が出馬に挑戦する理由

—今年、地方選挙に挑戦する6人の仲間たちの想いを聞きました—

4 議会の近代化と、参加型まちづくりを目指して

椋田 秀雄 (八街市、3期目)

私は1967年に国鉄に入ったのですが、マル生(生産性向上)運動に捲かれ労働者が激しく対立した時期で、いわゆる「経済発展」を捉えました。一方、当時住んでいた都営住宅の敷地が日本化学の穴開けで汚染され、対策に奔走してました。80年に「東京圏環境アセスメント条例」の直接請求運動に参加、必要の倍を超える署名を集めたにも関わらず都議会が強行否決、市民の声が生まれる政治の必要性を、痛感しました。その後には国会でのセシウム情報公開法、NPO法制定の市民運動や、被災地支援などに駆け回って来ました。

2013年、「みどりの会議」から推薦をもらって初挑戦(次点)。2007年に2回目の選挙で市議になりましたが、議員の多くは市長側で「私は与党」との感覚から質問せず、市長提案を丸のみという実態。私は「議会改革に関する提言書」を議長に提出し、市長も議員も直接選挙で選ばれる地方議会に「2元代表制」を提議して来ました。その結果、質問席の設置や傍聴席への資料提供などが実現。今は、農業委員や選挙管理委員長といった行政委員会の長の議会出席を求めるなど、市議会の横断的・前例主義の改革に取り組んでいます。

八街市は三田地区などの乱開発により急激に人口が増えた時期があったのですが、都市計画が未整備であつた上下水道の管や生活道路の整備が極端に遅れており、住民の35%が転出を望んでいるのが現状です。犯罪発生率も非常に高いことから、市民ぐるみで「ながら」を提案したい。市民の声に寄り添った政策運営に取り組み、市民の代弁者として、市民の知恵や能力を活かせる参加型のまちづくりを進めたいと思っています。

5 地域での足腰を作りながら、国政にもものを言っていきたい

浅川 博之 (市川市、初挑戦)

3-11がなければ、僕は政治の世界に足を踏み入れなかったでしょう。あつてはならない危険な存在、そして利害の境がある市民がの国に54基もあること、あのとき改めて驚かされた。それまでのいろいろな原発ができてきたから、政治的な方法から原発をなくしていけないとされている、その逆の歴史がある。政治的議員選挙に挑戦しよう、決意しました。そのころよく、環境ジャーナリストのさゆみゆみさんが教えてもらったのが「みどりの未来」(緑の党)の前身でした。実は以前から、きまこ「政治家にならなくてもいい」と言われていたのですが(笑)。

議員として4年経ちますが、地域のために働くこともできる、国政のために働くこともできる。緑の党から誰か国会に挑戦するときには、議員の立場で応援に行きます。それに、安倍政権が集団的自衛権の行使容認や憲法改正の動きを加速させていく中で、これからはこの時代に必要だから分かります。自分たちで、できることをしていかなければいけない。市民のつながり、地域での足腰をつくりながら、国政にもものを言っていく姿勢です。

一市民としてよりも議員の立場から、他の自治体で同じ意識を持った議員と草の根でつながっていく。それが国政にももの言っていくために、必要だと考えています。

議員は立法機関のほうですが、市川市議会では議案の90%が市長から出され、議員からは10%程度。議員同士の議論の場、議員が一緒に議論を持っていく場づくりに取り組んできていきたいと思います。

6 徹底した対話と議論で、納得の政治を

石井 敏宏 (館山市、2期目)

様々な各地の地方選挙を手伝ったときに、若い候補者たちが「すくずりやいがある」様々な人と出会うことができて、生きているのを見て自分もやろう、やってみようと思ったんです。要望ばかりしているの議員さんは逆に僕にコストカットに注力して、その分、福祉の充実や、税・手数料といった市民の負担減について考えました。

一人で始めたのが、すぐ高選してれる人も現れ、何とかなってからはまず残土処分場に対する反対運動の先頭になりました。結果的には危険性を感じながらも、条例改正の動きも起こすことができました。また、未解決のまだ中学生の自殺事件では足かけ2年、7回の一般質問を通して第三者委員会の設置に結びつきました。一方、どう考えようか費用対効果が合うとは思えない15億円の舟形バイパス事業は、18対2で可決されました。この結果外野の自治体を見回してきて、そうした無謀な計画にストップをかけたところがあったんです。

北海道二七町では徹底的な情報公開を進め、住民同士の徹底的な議論があった。相手の立場も尊重しながら勝負を突き合っていく、公開の場で話して「お、孫や子どもに借金も返済しなきゃいけない、たいへん」といふような議員さんが出てくるというんです。会津若松市や栗山町もそういう、より効果的あるいは身の丈に合った規模にしていった。一種の「法則」を見つけた気はしますが、それが本来あるべき姿なのだと感じました。

2期目では情報公開と住民参加の2つを進めて館山市にも議会制民主主義を取り戻し、子育て支援や高齢者福祉の充実、生活道路の整備などについて、住みやすい、訪れたい館山を作りたいと思っています。